

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：32635

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12949

研究課題名(和文) 初期インド密教文献を通じた最初期のアビシェーカ(灌頂)儀礼に関する研究

研究課題名(英文) Studies on the early stage of the abhiseka ritual prescribed in the scriptures of the early form of Indian tantric Buddhism

研究代表者

大塚 恵俊 (OTSUKA, SHIGETOSHI)

大正大学・仏教学部・非常勤講師

研究者番号：20774582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の主たる目的は、初期インド密教経典に規定されるアビシェーカ儀礼の特徴を考察することである。そのために、密教の様々な儀礼実践の初期形態を探る上で最も重要な経典の一つである『宝楼閣経』を中心として、関連文献を精査した。『宝楼閣経』第3章に説かれるマンダラ儀則のサンスクリット語およびチベット語の試験的校訂テキストを報告した。そして、『宝楼閣経』に規定されるアビシェーカ儀礼の主な目的は、儀礼対象者に一種の授記を与え、さとりを得るといった目的に向かって努力するように奨励することにあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、従来ほとんど手つかずの状態であった初期インド密教文献の文献学的研究に取り組み、当該研究分野における基礎研究の構築に寄与したといえる。また、密教儀礼の中心を担うアビシェーカ儀礼を取り上げて、その最初期の形態と機能を明らかにすることで、儀礼実践の側面から、インドにおける密教の形成と展開に関する新たな知見を提示した。これらの研究成果は、密教が伝播した東アジアの広範囲において、今なお実践されている密教儀礼の祖型を明らかにするための研究の一助となり得るものである。また、文化人類学や宗教学といった近接する学問分野に対しても、有益な波及効果を期待することができる。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research project is to examine the characteristics of the abhiseka ritual prescribed in the scriptures of the early form of Indian Tantric Buddhism. To this end, I have investigated the *Mahamanivipulavimana(宝楼閣経: MaMaViVi), one of the most important scriptures to examine the early form of various ritual practices of Tantric Buddhist traditions, and other related texts. I have presented a preliminary edition of the Sanskrit and Tibetan texts of the section of the mandala rituals prescribed in MaMaViVi chapter 3. Furthermore, I have also clarified that the main purpose of the abhiseka ritual prescribed in the MaMaViVi is to give a sort of a prophecy to the target of this ritual and to encourage him to strive for the goal of attaining enlightenment.

研究分野：インド密教

キーワード：インド密教 儀礼 実践 アビシェーカ 灌頂 宝楼閣経

1. 研究開始当初の背景

(1) インド密教の発展に伴い、高度な教理や実践の体系をそなえて成立した後代の密教文献は、近年、国内外を問わず多くのインド密教研究者によって研究対象とされている。一方、攘災招福の現世利益を得るための簡素な儀礼実践を中心に説く初期段階の密教文献は、インドにおける密教形成期の実際を伝える第一資料であるものの、稚拙な文献群として評価される傾向が強く、主な研究対象とされてこなかった。それゆえ、初期の密教文献の文献学的研究はほとんど進展しておらず、その基礎研究の構築は急務である。

(2) インド密教は、儀礼実践を中心とする新たな実践体系を構築し、それによって、現世における世俗的な利益の獲得から、解脱を始めとする宗教的高次の境地への到達まで、様々な目的の成就を約束する。しかし、そのような儀礼実践を重視する姿勢が、当初それに消極的な立場にあった仏教の中でいかにして芽生え、醸成されていったのかということは必ずしも明らかにされていない。したがって、インド密教において儀礼実践が不可欠であることは承認されながらも、その諸実践の初期形態や展開過程に関する詳細は、ほとんど知られていない。特に、密教の正統な修行者となるための入門儀礼として実践されるアビシェーカは、インド密教儀礼の中で最も重要な位置にあるにもかかわらず、その形成過程に関する研究が十分になされていない。

(3) (1)(2)に示した研究課題に取り組むためには、第一に、一次資料となるサンスクリット語原典が現存し、緻密な文献学的研究を支えるチベット語訳文献や漢訳文献との対照が可能である初期インド密教文献を取り上げる必要がある。第二に、インド密教における初期のアビシェーカ儀礼を実践するための儀則(マニュアル)をそなえ、さらには関連する種々の儀礼実践を説く初期の密教儀礼文献を精査する必要がある。

2. 研究の目的

上記1のような問題意識を前提として、本研究課題は、文献学的手法により、アビシェーカ儀礼の初期形態とその機能について解明することを目的とした。その具体的な内容は以下の三点である。

(1) 6世紀頃の成立が見込まれ、インド密教最初期のアビシェーカ儀礼を説く『宝楼閣経』「マンダラ儀則」を主な研究対象とし、文献学的手法により、当該文献の基礎研究を完成する。

(2) 『宝楼閣経』「マンダラ儀則」において規定されるアビシェーカ儀礼を精査する。この作業を基盤とし、同時代の成立が見込まれる初期インド密教文献およびその他の関連文献所説のアビシェーカ儀礼にまで考察対象を広げて、インド密教における初期のアビシェーカ儀礼の特徴を明らかにする。

(3) 一連の成果を整理し、インド密教における初期のアビシェーカ儀礼の形態と機能を考察する。さらには、インド密教におけるアビシェーカ儀礼が入門儀礼として確立されていく過程の一端を描き出す。

3. 研究の方法

上記2において示した目的を遂行するために、以下の手順によって研究を進めていく。

(1) 『宝楼閣経』第3章「マンダラ儀則」を取り上げて、本経の一次資料となるギルギット出土サンスクリット語断簡写本に基づき、チベット語訳および漢訳の類本を対照させた試験的校訂テキスト、試訳、および重要語のグロッサリーを作成し、当該儀則の文献学的研究を進める。

(2) (1)によって得られた成果にもとづき、『宝楼閣経』所説のアビシェーカ儀礼を精査する。そして、当該文献と同時代の成立が見込まれる『蘇婆呼童子請問経』などに説示されるアビシェーカ儀礼との比較、考察を通じて、初期インド密教文献所説のアビシェーカ儀礼の全体像を把握する。さらには、その他の関連文献に確認できるアビシェーカ儀礼およびそれと類似する儀礼も考察対象とし、初期インド密教文献所説のアビシェーカ儀礼の特徴を浮き彫りにする。

(3) 一連の成果を整理し、初期インド密教文献を通じた視点から初期のアビシェーカ儀礼の形態と機能について明らかにする。また、本格的な密教儀礼の実践法をそなえた密教文献において説示される、入門儀礼としてのアビシェーカとの接点について考察し、インド密教の展開と共に、アビシェーカが入門儀礼として確立されていく過程の一端を究明する。

4. 研究成果

上記3に示した研究方法にもとづいて得られた研究成果は以下の通りである。

(1) 『宝楼閣経』第3章「マンダラ儀則」の基本資料を精査することにより、以下のような点を明らかにした。

ギルギット出土サンスクリット語断簡写本の読みには、文法および統語論上で解決困難な問題を抱えている箇所が散見される。そして、当該サンスクリット語写本の読みは、チベット語訳ヘーミス写本カンギユル(次項目を参照)の読みと非常に近い関係にあることを確認した。

チベット語訳カンギユル諸本の読みを精査した結果、ツェルパ系とテンパンマ系、さらには両系統を校合して編集されたと考えられる版との三者間において、重要な異読はほとんど見当たらず、その多くが助辞や動詞の形などの単純な相違による異読であることを確認した。しかし、近年その存在が明らかになったチベット語訳ヘーミス写本カンギユルは、上記の主要なカンギユル諸本とは大きく異なる読みを示している。サンスクリット語写本を始めとする諸類本の読みと比較したところ、その読みは当該儀則を精読する上で重要な読みであることが明らかになった。

本研究では「大正新脩大蔵経」所収の菩提流志訳と不空訳の2本の漢訳を対照資料として用いた。両漢訳は、総じて上記のサンスクリット語写本およびチベット語訳ヘーミス写本の読みと合致しており、当該儀則を精読する上で両漢訳の読みとの対照研究が不可欠であることを確認した。ただし、不空訳には、体系的に整備されたマンダラ儀則やそれに伴うアビシェーカ儀礼を熟知していた訳者による補足を思わせる箇所が一部に認められる。

①～③をふまえ、一次資料であるサンスクリット語写本の読みを、チベット語訳(特にヘーミス写本)および2本の漢訳の読みと校合することにより、当該儀則の試験的なサンスクリット語校訂テキストを作成した。また、チベット語訳は、主要版とヘーミス写本との間に異読の範疇を超えた相違を確認できるため、両者の読みに依拠したチベット語訳テキストを別々に整理し、類本との比較対照ができる形式で報告した。これらの作業と並行して進めた訳註研究については、上記の試験的なサンスクリット語テキストに依拠して訳出し、サンスクリット語原典が欠落している箇所は、サンスクリット語テキストと最も近い関係にあるチベット語訳ヘーミス写本を底本として、諸本の読みを対照しながら進めた。

(2) 『宝楼閣経』「マンダラ儀則」を中心とした初期のアビシェーカ儀礼を精査することにより、以下のような点を明らかにした。

「水をそそぐこと」を意味する「アビシェーカ(abhiṣeka)」は、動詞 abhi- sic に由来する語であるが、管見の限り、『宝楼閣経』「マンダラ儀則」に確認できる abhi- sic に由来する語は、現在サンスクリット語で確認できるインド密教文献の中で最初期の用例と考えられる。そして、当該儀則において示されるアビシェーカ儀礼は、非常に簡素であるものの、儀礼対象者に対して様々な効果をもたらす。すなわち、儀礼対象者は、自身に伴うあらゆる障りが浄化され、如来によって摂受され、そして激励され、最終的に不退転となって菩提道を円満すると示されている。このような儀礼対象者にもたらされる殊勝な徳性は、『般若経』に確認できる、般若波羅蜜を求めて様々な徳目を実践し、その教えの弘布に尽力する者たちに対してもたらされる、如来の摂受や加持と同質のものであり、あるいはまた、『阿弥陀経』に確認できる、当該の法門の名を聞き、諸仏の名を憶持する者にもたらされる、無上正等覚に対する不退転の境地と同質のものである。以上の考察より、主要な大乘経典において宣揚される実践徳目が、『宝楼閣経』「マンダラ儀則」ではアビシェーカという儀礼実践に置き換えられていることがわかる。そして、アビシェーカ儀礼の実践によって、大乘仏教の理想とする境地に至ることを保証していると思われる。

『宝楼閣経』と同様に、6世紀頃の成立が見込まれる『蘇婆呼童子請問経』には、『宝楼閣経』とは性格の異なるアビシェーカ儀礼が説かれている。そこで、『蘇婆呼童子請問経』所説のアビシェーカ儀礼について、6世紀を活躍年代とするヴァラーハミヒラが編纂した Brhatsaṃhitā における「プシュヤ沐浴」(Puṣyasnāna) との比較を通じて考察した。その考察内容は次のようにまとめられる。(a) 『蘇婆呼童子請問経』のアビシェーカ儀礼は、非仏教的な性格を有する。(b) マントラを念誦することによって忿怒尊を宿らせた水は、儀礼対象者に取り憑いている障礙者たちに物質的に作用し、浄化の機能を果たす。(c) 浄化や攘災を目的としたアビシェーカ儀礼の文脈では、abhi- sic に由来する語は snā と同様の意味で使用されており、両者は同じ範疇に属する用語と考えられる。

(3) 一連の研究成果を整理した上で、インド密教における初期のアビシェーカ儀礼の形態と機能について、以下のように考察した。

『宝楼閣経』「マンダラ儀則」所説のアビシェーカ儀礼の主な目的は、儀礼対象者に対して一種の授記を与え、さとりを得るといった目的に向かって努力することを奨励することにある。

『蘇婆呼童子請問経』所説のアビシェーカ儀礼は、儀礼対象者の浄化、あるいは攘災のために実践され、インド諸宗教の儀礼実践に広く通底する要素を確認できる。

6世紀頃の成立が見込まれる初期インド密教文献に規定されるアビシェーカ儀礼の儀則には、特定の行者集団における規範遵守や師への帰依を促すような記述を確認できない。またそこに

は、密教の行者集団を形成し、それへの帰属意識を高めるような儀礼実践も確認できない。

以上の考察により、6世紀頃の初期インド密教の段階では、入門儀礼としてのアビシェーカは確立していなかったと考えられる。

(4) 以上の主要な研究成果と並行して、以下の点も当該研究課題を通じて明らかになった。

中国甘肅省敦煌市博物館に所蔵されている『宝楼閣経』敦煌出土チベット語訳と目される写本を調査したところ、当該チベット語訳写本が本経の第1章から第4章の前半部分に対応していることを確認した。ただし、写本の汚れが目立ち、また全体にわたって書写されているチベット文字の字体が整っていないことから、判読困難な箇所が少なくない。本研究期間では、その詳細を報告するまでには至らなかったが、地理的な観点、また仏教伝播の歴史的な観点からしても、本経のサンスクリット語ギルギット写本とチベット語訳敦煌写本の関係は密接であることが予想されるため、今後その詳細を報告する機会を持つことにしたい。

「研究成果」(1)–において言及したように、チベット語訳ヘーミス写本カンギュルの読みは、従来、校合作業に用いられてきた主要なカンギュル諸本の読みとは大きく異なり、異読の範疇を超えていることから、これまで知られてきたカンギュル諸本とは全く系統の異なる読みを保持しているといえる。このようなヘーミス写本の特徴は、本研究で扱った『宝楼閣経』のみならず、他の文献にも共通することが予想されることから、本研究課題を通じて得られた成果の一端が、今後のチベット語訳文献を扱う研究に対して新たな視点を加えることにつながったといえる。

(5) 今後の課題

アビシェーカが7世紀以降のインド密教において入門儀礼として確立されていく過程をより詳細に知るためには、本研究課題で扱えなかった初期インド密教文献のさらなる精査はもちろんのこと、同時代のインド諸宗教における同様の儀礼実践との比較が不可欠である。また、インド密教において、いつ頃、どのように入門儀礼が確立されたのかを明らかにしようとする研究は、密教行者の集団形成をめぐる研究とも呼応する。今後の課題は、このような問題意識を念頭に置き、アビシェーカ儀礼が入門儀礼として確立されていく過程について、より具体的な形で究明することであり、最終的にはインド密教の展開を实践面から明らかにしていく作業へとつなげていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大塚恵俊	4. 巻 70
2. 論文標題 インド密教における初期のアビシェーカに関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 123-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大塚恵俊	4. 巻 65
2. 論文標題 『宝楼閣経』「マンダラ儀則」：梵蔵漢対照テキスト	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 豊山学報	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大塚恵俊
2. 発表標題 インド密教における初期のアビシェーカに関する一考察
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------